

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	ももちパレスネットワーク	
施 設 名	福岡県立ももち文化センター	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	859	(千円)
	公 演 事 業	0 (千円)
	人 材 養 成 事 業	0 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	859 (千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	社会包摂に取り組むための普及啓発事業	2020年10月 2020年12月～3月	講師： 山田恵理香、五味伸之 アシスタント： 五味伸之、古賀今日子、田村さえ 他	参加者 25(②15 ③10)	参加者 9 ②9③ 0(事業中 止) 入場者 0 (事業中 止)
		福岡市立田島小学校 ももち文化センター		入場者 350(③)	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

福岡県立ももち文化センターは、勤労青少年の教養向上・健康増進等のための施設として昭和48年に開館した。その役割を終えた後には、県民に文化活動の場を提供し、芸術文化の振興を図るための場として、広い年齢層に利用されている。平成27年度より当事業体が指定管理を受託し、管理運営にあたっており、2期目にあたる現在、「文化芸術のもつ『多様な価値』を活かして未来をつくる施設」を基本理念とし、あらゆる地域文化資源を通じた地域文化の活性、社会的包摂を推進することを大きな役割の一つと捉え、事業計画・展開を行っている。当事業については、令和2年4月に制定された福岡県文化芸術振興条例-第三章第三節「障がいのある人の文化芸術活動の推進」を県有施設として牽引するべく計画したものである。

ワークショップ事業については、関係する学校や関係団体や参加者に事前の聞き取りをし、ニーズの掘り起こしを行った上で、事業運営を行った。コロナ禍で参加人数は伸び悩んだが、新規参加者もあり、障がいを抱えていても文化芸術に触れたいという欲求を満たす場が提供できていることは、この事業の趣旨・目的とも一致している。また、当該事業については、実際の運営の様子を見学したい等の希望が多くあった。これは社会包摂事業に関わりたい人が増えているということでもあり、当事業に対する期待度が高いとも言えるが、現在のところ見学等は想定外で、受け入れを行うには至らなかった。場を開く方法については、これまでも数年おきに研究会など、実施してきたが、今後もこのようなニーズが増えてくることを考え、その方法や頻度など、検討していくことが必要である。

当施設大ホールは800名の中規模劇場で、市民からのニーズも高く、利用率は高い。この規模のステージで、障がいのある人も一緒に行う創作発表の場は県内でも稀である。福岡市内には芸術活動を行う当事者団体は多く、計画しているピープルアートパフォーマンスの舞台は、発表の機会として期待されている。また、総合演出を立てることで、ブツ切れの発表会ではなく、公演全体を一つの作品としての芸術性を高め、人々の関心を集めるよう取り組んできた。夏前から計画を進めていたが、コロナの感染症対策の為、各参加団体の活動が見合わせていたこと、また、一つ場所に集うことを目的の一つとしているこの公演事業は人が集うことがリスクとなる以上、開催は困難と考え開催を中止した。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

文化的意義：特別支援学級の子どもたちにとって、演劇ワークショップが初めて舞台芸術を体験する機会ということも珍しくない。そのような中で、多様性を尊重した現場づくりが出来ることは、彼らの今後の文化芸術への印象も変えるほど重要なことである。その点において、経験豊富なアーティストを派遣出来ていることの役割は大きく、助成財源があるからこそ成しえることである。

社会的意義：社会包摂事業を企画する上で、小学校へのアーティスト派遣だけでは、その対象に偏りがある為、若者～大人を対象とした場を施設にて実施している。昨年に続き、充実した回数の設定でワークショップを行うことで、その地域に暮らすどんな人でも立ち寄れる場の定着を目指し、事業を実施することが出来た。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

「心豊かで多様性のある社会、あらゆる人々が文化芸術を通して社会に参画し相互理解が広がり、多様な価値観が尊重され、こころ豊かな社会が形成されている」ことが、事業を通して具体的に実感できることを目指し、事業を計画。

特別支援学級でのワークショップでは、それをきっかけに不登校だった児童が学校へ来る頻度が上がるなど、ワークショップの効果が具体的に見られた珍しい事例があり、目標としていたことは達成できたと考える。

一方、若者を対象としたワークショップでは、参加者数において、目標を達成することができなかった。

【目標値：15名】 ⇒ 【実績値：9名】

これまでの実績や検証内容、構築してきたネットワークを用い、事業周知や参加者募集を可能な限り積極的に行ったが、コロナ禍の為、出向いて説明をすることは困難であった。参加意思があっても、感染リスクを避ける為、今年度の参加は見合わせる者も多かった。また、実施予定時期が寒かったことも、リスクの一つであった。次回以降は設定時期の見直しを行いたい。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

今年度の事業実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、開催の中断等を余儀なくされた場面が多くあり、全体的に当初の計画通りとはいかなかった。また、年末～年明けにかけて予定していた事業が多く、それらは後ろ倒しにもできず、中止として進めるしかなくなり、逃げ場がなかったため、次年度以降については、開催時期を出来るだけその年内で進めていくことを検討している。

○特別支援学級での演劇の手法を活用したワークショップの実施

計画時期：2020年9月～2021年3月 6回

実施時期：2020年10月 5回

新型コロナウイルス感染症のリスクを下げる為、時期をひと月に限定し、ワークショップを実施。また、実施にあたっては当初予定より、派遣講師の人員を減らすことで、学校側の理解を得、事業を行うことが出来た。これらに伴い、該当の事業費は当初予定よりも減額となったが、人員削減やコロナ対策の為のワーク再考により負担が増えた講師への謝金を手厚くするなど、適切な予算執行を行った。

○障がいを持つ若者を対象とした演劇ワークショップ

計画時期：2020年12月～2021年3月 体験1回、連続ワークショップ10回(うち、発表会1回)

実施時期：2020年12月～2021年3月 体験1回、連続ワークショップ5回(うち、発表会1回)

12月に体験会を行い、1月から連続ワークショップを実施の予定としていたが、天候不良や緊急事態宣言発出に伴う事業開催見送りに伴い、10回を予定していたところ、発表会も含め、5回の実施となった。

実施回数は減ったが、緊急事態宣言の解除の目処が立たない中、再開に向けた準備を常に行ってきたことは、費用の上では負担であったが、それを行ったことで、少ない回数の中、質・満足度の高い発表を行うことが出来たと考える。

○ピープルアートパフォーマンス

計画時期：2020年3月20日

実施時期：事業中止

多様な人たちが創る舞台芸術作品の上演の場として開催予定であったが、参加予定団体の多くが障がいや持病を抱える参加者であるため、コロナ禍の中、創作活動を行うことが困難であり、開催を見送らざるを得なかった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

福岡県立ももち文化センターは、昭和 48 年に、勤労青少年センターとして設置され、開館当初より文化教室を実施するなど、県民が文化に触れる場の一端を担った後、平成 19 年以降は施設を県民に貸し出すことにより、舞台芸術の振興やアマチュア文化団体の育成の場として活用されることとなった。800 席の大ホールは、同等規模の施設が福岡市内に不足していることから、高い利用率を維持する一方で、大ホール以外の貸室は会議室が主で、舞台芸術の実演家にとっては来館頻度の少ない施設となっており、指定管理者公募仕様書に強調されている「舞台芸術の殿堂」という言葉との乖離が見られた。その為、平成 27 年より、当事業体が施設管理運営を行うにあたっては、福岡にて舞台芸術振興を積極的に行ってきたアートマネジメントセンター福岡と共に、自主事業の企画・運営を行うことで、福岡県総合計画の施策に沿った自主事業を展開している。

○特別支援学級での演劇の手法を活用したワークショップ

授業の一環として行う為、学校、担当教諭の協力・協働なしでは有意義な時間は作れない。事前には校長先生や担当教諭へ、社会包摂事業の意義と演劇ワークショップで出来ることを共有。また、参加する生徒たちの抱える課題や、担当教諭がワークショップの時間に期待することを聞き取り、目標を設定することで、協働関係をより深めていった。

また、障がいを持った人たちとのワークショップの経験が豊富な人材にアシスタントとして加わってもらうことで、これまでよりも、より一層、当事者に有効性の高いワークショップを行うことが出来、結果として、不登校の子どもが、演劇 WS をきっかけに学校へ来る頻度が上がるなど、学校側の満足度も高く、継続的なワークショップの実施の申し出があった。次年度に限らず、以降の開催へとぜひ繋げていきたい。

○障がいを持つ若者を対象とした演劇ワークショップ

これまで同様スペシャルオリンピックス日本・福岡と連携しながら事業開催へ向けた準備を行ってきた。コロナ禍における先方の動向や、事業実施時の対策など、情報共有を行いながら準備を進めた。

参加者本人だけでなく、ワークの様子や発表を見た家族や支援者が、自分の人生を振り返る瞬間が持てるような作品作りを意識して、プログラムの組み立てを行った。発表会へ来場した方からは、短い発表時間であったにも関わらず、観劇の充実度、満足度共に高い反応を得た。

これまでの社会包摂の取り組み実績を発信する場として、施設ホームページに、社会包摂に関するページを作成。検証結果についても、報告書を掲載している。今後も当館での様々な取り組みを紹介するページとして、コンテンツの増設、見直しを行っていく。

また、全国公立文化施設協会発行の「令和 2 年度 障害者文化芸術活動推進に向けた劇場・音楽堂等取組状況調査 報告書」に当館の社会包摂事業の取り組みが掲載された。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

令和2年4月に策定された「福岡県文化芸術振興条例」に障がいのある人の文化芸術活動の推進が明文化され、県設置の施設である当館においても、より一層、力を入れた環境づくりに努めていかねばならない。

社会包摂事業において、ファシリテータの育成も大きな課題の一つである。当事業のファシリテータは地元の演劇実演家に依頼しているが、それぞれが交流する場を設けることで、それぞれの糧にもなり、互いの知識や経験が現場に反映されることで、より豊かなワークショップを展開することが出来た。事例の少ないワークショップを進行していくファシリテータは孤独に陥りやすいが、これまでの事業実績や蓄積してきたネットワークを通じて、今後もこのような場を設け、地元実演家をはじめ、地域で活動するアーティストがその力を発揮する場を提供していきたい。

また、多様な価値観を示す役割を考えた時に、芸術性の高い作品の上演等により広く一般市民へ理解を促す一方で、文化施設そのものが当事者から親しまれ、居場所となっていることも非常に重要なことと考えるが、障がいを持つ若者を対象としたワークショップでは、参加者がこの場を自分の居場所と感じている様子が見られ、文化芸術に触れる機会とは、また別の役割を帯びてきており、継続事業の大きな意義と捉えている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

指定管理受託の2期目が始まったところだが、社会包摂に資する事業については、県からの評価も高く、今後もこのような先進的な取り組みを進めていけるよう、全体の運営についても高い評価を目指して管理運営並びに自主事業を行っていく。若者を対象としたWSでは、九州大学に検証で関わってもらい、実施内容の振り返り・検証を共に行い、実施内容の精査や個別目標の設定を行うことが出来た。

人材：

舞台芸術に精通したアートマネジメント組織が自主事業の企画制作・運営を担当することで、その専門性やこれまでの活動実績、それらによって構築されたネットワークを活用し、地域の舞台芸術振興につなげている。また、今後も学生インターンシップを受け入れ、現場実習などを積極的に行うことで、アートマネジメント分野に関心の高い学生を、将来、当施設だけでなく地域の文化芸術の現場で活躍できる人材として育成していきたい。

財政：

当施設は利用料金制で運営しており、コロナ禍により今後も減収が予想され、事業費の大幅削減も行われたが、優れた自主事業は評価軸の一つでもある為、事業体内部でも、その意義を共有しながら、予算を確保してきた。今後は、自主事業を担うアートマネジメントセンター福岡単独での助成金申請も含め、都度調整をする形での財源確保ではなく、年度当初に全体予算を確保できるような動きをしたい。

ネットワーク：

これまでも九州大学などの教育機関との連携しながら、事業運営・進行を行ってきた。今後も事業振り返りを含め、継続的に関わってもらうこととなっている。

更に社会包摂の動きを広げていく為にも、現在、福祉作業所等との連携を進めている。福祉分野にて芸術活動を行うことは容易くないが、障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の制定等に伴い、導入に関して興味・関心を持っている福祉団体は増えているので、これを好機とし、活動の前進を大いに進めていきたい。

施設：

まもなく築50年を迎える為、老朽化が問題となっているが、本年は館内空調と外壁の大規模修繕を行った。他にも、このコロナ禍で機会が増えた大ホールでの映像配信に対応するため、大ホールにインターネットの差込口を増設するなど、ニーズを把握・対応しながら、より安全で少しでも快適な空間となるよう、運営を行っている。次年度以降も大ホールの改修など、中期修繕計画を立て、安全、快適な空間を目指し、管理を行っている。